

JICA国際協力 中学生・高校生エッセイコンテスト

それは、1962年、「海外移住懸賞作文」からはじまりました。

このコンテストは、世界の出来事と向き合いながら、若い世代が自分の言葉で考え、書くことを大切にしてきました。時代が変わり、問いのかたちは変わっても、問い続ける姿勢は、変わりません。10年ごとに刻まれてきた「問い」の軌跡をたどります。

言葉が映す、
時代のかたち



1962年エッセイテーマ

私(僕)の南米観 わが国の海外移住はどうあるべきか

世界の出来事

キューバ危機



1970年エッセイテーマ

世界に伸びる私の夢 若人の海外発展への道

世界の出来事

日本万国博覧会

大阪で開催



1980年エッセイテーマ

海外に生きる私の夢 これからの海外移住に思う

世界の出来事

イラン・イラク戦争



1980年審査講評

審査を終えて

全国高等学校海外教育研究協議会 会長 佐藤勇夫

現代は、もはや一国だけの繁栄など望むことのできない時代であるといわれている。資源、エネルギー、食糧のこと、更に南北の問題といい、国々の相互依存をより深めないことには解決の糸口もつかめないのが実情であろう。しかも国際事情はますます複雑化してゆくものと考えられる。

その意味で、今日の青少年は、急激なしかも本格的な国際化の時代に生きなければならない若者が、どのような目で国際交流を見、国際協力、海外発展にいかにか備えているかを知ることがをねらいとして、作文の募集がおこなわれた。

本年度の課題は、中学生が「海外に生きる夢」であり、高校生は「これからの海外移住に思う」であった。5月15日に締切られた昭和55年度の作文応募総数は、847編(中学生248、高校生599)であり、慎重な予備選考のうえ、中、高各々25編を候補作品とした。6月13日文部、外務、総理府等の外部の審査員も加わり最終選考に入る。結果としては、中、高各々12編を佳作とし、2編ずつを特選と決定した。

入選作品は、異郷で必死に花づくりをした「父の姿」、「お母さんと一緒に暮したい」とのスリランカの子供の声、「ネパールの碧い空」との出合いなどと、いずれも自分の身近なものが契機となり、国際理解、協力への共感となっている。しかも、入選作品の多くは、それらによって触発された感動を、そのまま記録するのではなく、現実から見直す吟味を加えてまとめている。したがって、記述は単なる「夢」、「思う」に終ることなく、自己の立場から極めて具体的に表現されており、説得力もあり真実に迫る力強い内容であった。論旨も、問題提起、説明、強調、結論と各人のリズムをもった流れをしめしているので、書き手のそこに生きんとする生命の迸と誠実さとを、よく読みとることができる。また、このような描写から、現在の中学生、高校生の国際社会に逞しく歩み出ようとしている姿の一端を見ることができ、頼もしさを感じた。なお、できることなら、開発途上国でことばの壁や日常生活でのとまどいなどを越えて活躍している協力隊員の報告、多様な価値感の中で育ち、国際性を身につけて帰国した友人たちとの切磋琢磨、学問のあり方さえ問われている人間の知識の問題などからも底力のある国際理解、協力への若々しい素朴な提案などはできないものだろうかとも考えてみた。大いに期待したいところである。

1990年エッセイテーマ

えがお・で・あい

世界の出来事

ネルソン・マンデラ
大統領就任



1990年審査講評

審査講評

神津カンナ

“女性の時代”という言葉がもてはやされているが、このコンテストにも、そのような傾向が感じられた。

というのも、最終審査に残った二十五作品のうち、二十一作品までが女性によるエッセイだったのである。これはかつてないようなことで、私もいささか驚いた。その少数派の男性陣の中で頑張ったのは、加瀬君である。彼のエッセイには、情報や体験をただ綴るということだけではなく、彼自身の独自の考えや思いがあり、それが作品の基本になっている。こういう、しっかりとした視点を持って書くという姿勢は、文筆という作業の中で最も大切なことである。とかく知識の羅列や、ありきたりの感想でごまかす作品が多い中で、彼のものが評価されたのは、まずその点だと私は思う。

野々山さんの作品にも同じようなことがいえる。多少、論理の展開にわかりにくいところはあるが、その人にしか書けないという個性があり、それがとても光っていた。限られた短い講評の中で、全ての作品に触れることはできないが、印象に残ったものをいくつか挙げておこうと思う。

まず、自分の立場というものをしっかりと見つめて書いた作品として、竹村さん、吉原君、佐藤さんのものが印象深い。竹村さんは在日韓国人として、吉原君は中国残留孤児の子弟として、そして佐藤さんは農業高校の学生として、その立場をきちんと踏まえ、冷静に独自の視点をあきらかにしながら書いてくれた。三作品とも読みごたえがあつて、私自身にもとても勉強になった作品であった。

また、題材やテーマの捉え方として面白かったものもいくつかある。ニューヨークのレストランでの風景を起点として構成した芳賀さんの作品。援助する必要性と同時に、我々の生活の中で、節約する心構えがいかに大切かと書いていた村山さんの作品。そして日本の伝統や文化を大切にするという視点から、国際交流を考えた中川さんの作品。ユニセフカードや使用済み切手を集めるという、身近かなポイントから自分の国際観を展開した橋本君の作品。また、独自の文体でユニークなエッセイを作り上げた鈴山さんの作品。

今回は、ありきたりの論理の展開や、安易な感情論が少なく、みなそれぞれに個性的でどこかキラリとする作品が多かったように思う。今回から“エッセイコンテスト”と名称が変わったのは、新しい時代を担う若者たちには、既成の援助観や、国際協力の方法に縛られることなく、のびのびと世界に出て行ってほしいという願いのあらわれである。

ユニークさや批判や冒険を恐れずに、これからもどんどん、自分の想いや考えを、原稿用紙に叩きつけてほしい。必ず受けとめてあげるから…と、私は声を大にして、みなさんに伝えたいと思う。

2000年エッセイテーパ

途上国や国際協力について 考えている事



世界の出来事

ミレニアム開発目標を
国連が発表

2000年審査講評

審査講評（中学生の部）

歌手・教育学博士 アグネス・チャン

エッセイコンテストに入選した中学生のみなさん、本当におめでとうございます。入選された作文は、文章力はもちろん、自分の体験を元に書いたものが多く、とても説得力があり、人の心を動かす力にあふれていました。

特選に選ばれた高柳さんは『愛の袋』の中で、自分たちが不必要なモノを人にあげるのではなく、相手が本当に必要とするものを提供するのが本当の援助だと訴えています。世界第二の経済大国である日本で生活していると、自分たちは援助する側であり、相手はそれを受け取る側と、つい錯角してしまうことがあります。しかし、それでは本当の『愛の袋』にはならないことを彼女は教えてくれました。

『アフリカの毒』というエッセイを書いた田中君は、アフリカの人々と共に努力していきたいと訴えています。決して上から見下ろすことなく、悪い状況を「一緒に闘っていこう」という姿勢です。21世紀、アフリカをどうやって立ち直らせるかが重要な課題だけに「共に生きる」事に気づかせてくれる力強い文章が感動的でした。今も地球上のどこかで戦争は続いています。疲弊した大地、貧富の差で苦しむ人々のために、私たちが出来ることはたくさんあります。

18歳以下の年齢で、日本の子供たちと同じような生活が出来る子供は世界で10人に一人とされています。その恵まれた一人として日本に生まれたことは、決して偶然ではないとみんなに自覚してほしいと思います。お互いの違いを理解し合い、助け合っていける世の中を実現していくのは、これからの若者、子供たちであるからです。

2010年エッセイテーマ

行動 ～地球の仲間のために、 私たちができること～

世界の出来事

アラブの春



2010年審査講評

審査講評（高校生の部）

審査員長 星野知子氏

将来の夢はなに？と訊かれて、胸を張って答えられる若者がどれだけいるだろう。振り返れば、高校生だった私は具体的な目標などなかった。自分は何も得意なことがないけれど、できれば人に喜ばれるような仕事をしたいなあ、くらい。全くお恥ずかしい。最終審査に残った作品を読むと、真摯に将来を考え、世界に目を向け、自分を見つめている人たちがばかりで感心する。

高橋瑞季さんの作文は、飛び抜けて「熱」を発散している。カンボジアから帰ってすぐに自分にできることを探し、行動を始める。その情熱は誰かのためだけではない。行動することで返ってくる「きらきらした眼差し」に胸打たれ、自分の喜びとエネルギーになる。それが素直に作文に表れている。

小林千奈津さんは、悩みながら進んでいくタイプだ。マニラで様々なことに戸惑いながらひとつひとつ肌で感じていく。そして帰国してからも迷いながら「農学を学ぶ」という答えにたどりつく。じっくり取り組んでいく姿勢は好感が持てる。

古瀬世那さんは、個人でというよりグループでの支援活動の素晴らしさを教えてくれる。同じ思いで集まった仲間たちと満天の星を見上げたときの感動。モンゴルの大地でのワンシーンはとても美しく、うらやましくなる。

審査を終えてみると、最終的に魅力的な作文は、(どんな活動をしているかも大事だが)自分の心の動きや喜び、感動が読み手の心に伝わってくるものだ。さらに将来に向けて持続していく輝きがあるもの。今回の入賞者がより一層輝くよう願っている。

2020年エッセイテーマ

世界とつながる自分

— 私たちが考えること、できること —

世界の出来事

新型コロナウイルスの感染
世界的に拡大



2020年審査講評

審査講評（中学生の部）

教育評論家 法政大学名誉教授 審査員長 尾木直樹氏

「世界とつながる自分」が今年度のテーマでしたが、新型コロナウイルスによるパンデミックである意味、世界が一つの問題を通してつながらざるを得ない状況になりました。コロナ禍での3ヶ月に及ぶ休校や夏休み短縮などの困難な条件の中でよくぞ、皆さんこのテーマを取り上げて書き上げてくれました。感動と感謝です。ありがとうございます。

JICA理事長賞の大石理紗子さんは、夢に向かって学ぶフィリピンの高校生の「輝く」眼差しをきっかけに、これまでの自分の行動に対する意識を見つめ直します。その後生徒会長として自校の募金活動のありかたを変える発案をしたことで、自らの小さな発信が影響の輪を大きく広げることに気づく過程は、「自分事」として世界に関わる大切さを物語っています。

外務大臣賞の武田美紀子さんは、家族とのたこ焼きパーティー中の会話で得た気づきから、たこ焼きと世界とのつながりに興味を持ちます。材料の自給率や産地の情報を通して各国の文化、海洋環境の問題にまで関心を深める姿は、身近なモノから世界との繋がりについて探求することの重要性を改めて教えてくれました。

文部科学大臣賞の三浦あすかさんは、自分の暮らす別子山が抱える高齢化や過疎化の問題を、今後世界中が直面する最先端の課題であると捉え、解決のため地域の方と共に野菜と未来を創る活動に取り組みます。「世界に道を示す」という使命感のもと、コロナ禍の苦難をもエネルギーに変えて行動する姿勢に、これからの未来を切り開く希望を感じました。

未曾有の先が見えない時代ですが、みなさんのグローバルな感性と視点があれば、きっと新しいルネッサンスを興し、世界との絆をさらに太くしてくれるものと確信しています。全力で応援していきたいと思います。

2000年度 文部大臣奨励賞

テーマ：途上国や国際協力について考えている事

福井

チェミが流した涙

福井県立武生東高等学校 1年
永田 晃子

私には、木下チェミというブラジル人の友達があります。彼女は、私が小学生の時に転校してきて、そのまま同じ中学校に通いました。中学校に入ってから彼女とは別のクラスになり、部活も違ったので、廊下で会っても、あいさつを交わす程度になりました。

中学二年になり、クラス替えで彼女と私は同じクラスになりました。最初は、みんなめずらしそうに彼女に興味を示していましたが、そのうちだんだんと彼女と言葉を交わす子は少なくなり、いつの間にか、彼女は学校へ来なくなってしまいました。私達も、最初はとまどいしましたが、遠足などの行事ごとだけで彼女に会うことがいつしか普通に感じるようになってしまっていました。

彼女が学校へ来なくなり、数か月たったある日、私達は、音楽の授業で音楽室にいと、全員教室に戻るようにとの指示があり、教室に戻って数分ほど、みんながざわついていと、担任の先生と共に彼女が教室に入ってきました。彼女は、私服で、彼女の母親と、通訳の方とそしてカメラマンの人と一緒にいた。数か月ぶりに学校へ来た彼女は、私達に数か月ぶりに話しかけました。

「ブラジルに帰ります。」クラス中が静まり返りました。何も言えなくなったのです。

数日後、私達は彼女のお別れ会を開きました。彼女はポルトガル語を話す友達と一緒にやって来ました。お別れ会の最後に、彼女は私達に彼女の国のおどりを教えてくれました。自分の国の音楽にのっておどる彼女の目は輝き、今までに見せたことのない笑顔で笑っていました。

彼女が日本を去って数日後、テレビで彼女のことがとりあげられていました。私達に別れを告げる何か月も前から、彼女は、日本を離れる決意をしていたことや、本当は、何度か学校に訪れ、先生達といろいろ話し合っていたこと、そして、ブラジルへ帰って何をしたいかという質問の答えに、日本語の勉強が入っていたということ、など、彼女がブラジルへ帰った後に私達は、これらのことをテレビによって知りました。

特に、「学校に行きたい。」と言って、カメラの向こうで涙を流した彼女の姿は、今も脳裏をよぎります。

今、日本にはこういった学校に行きたくても行けない外国から来た子供達が増えているそうです。国際化社会といわれている今、私は、私は何て無知だったのだろうと、チェミに対してしてしまった事の重大さを悔やんでいます。私達は、知らないことが多すぎました。彼女に日本語を教えることができたのは、先生や親よりも、同じ目の高さに立っていた私達であったこと、彼女が私達に教えてくれたおどりのように、私達にも彼女に教えてあげられることが多くあったこと、そして教えるだけでなく、自分達が一步ふみ出していれば、自分達も多くの事を学ぶことができていたかもしれないということ。

国際化社会に必要なのは、言葉・文化に対する理解、そして相手が何を必要としているかということの理解だと思います。ポルトガル語しか話せなかったチェミと、日本語しか話せなかった私達、努力が足りなかったのかもしれませんが、心でつながることのできる方法が、あったのかもしれませんが。

国際化社会での日本の役割は、まず年齢を問わず、みんながオープン精神をもてるようにしていくことだと思います。心を開いて手を取りあえば、一人一人の故郷が国ではなく、地球になると思います。私は、チェミの流した涙が、意味のあるものになってほしいと思います。

2016年度 国際協力特別賞



テーマ：未来の地球のために～私たち一人一人にできること～

新渡戸の願い—平和への架け橋

金沢大学附属高等学校 2年
渡邊 英瑠

“INTERNATIONAL PACIFIST” ある碑に刻まれた文字が私の目に飛び込んできた。その碑はカナダのヴィクトリア市にあるロイヤル・ジュビリー病院の和風庭園の一角に建っていた。これは新渡戸稲造を祀ったものだった。昨夏私は両親と共にカナダ・アメリカを訪れた。父は20年前にカリフォルニア州の大学に留学していたので、その時お世話になった恩師と再会する為だった。今はヴィクトリアに住んでいる恩師の先生を訪ねて、奇遇にもこの碑に出会ったのである。私はこの碑に刻まれた言葉が忘れられず、帰国後、新渡戸稲造に関する本を読んだ。彼は晩年、国際連盟事務次長として孤立する日本に心を痛め奔走したが、バンフでの会議の後、病に倒れあの病院で亡くなったことを初めて知った。そして皮肉にもこの年に日本は国際連盟を脱退したのである。

じっと目を閉じると彼の大きな使命感に胸を打たれた。彼は米国に留学した時から自分のMISSIONは太平洋の架け橋になることだと思っていたのではないだろうか。そして1899年、外国人に日本のことを理解させたいという願いから、英語で『武士道』を出版し、これは世界的なベストセラーとなった。

カナダを後にして父の留学先に近いサンフランシスコに行った。1951年、ここでサンフランシスコ平和条約が調印されて、戦争が終結し日本にもやっと平和が訪れた。調印した場所は、現在WAR MEMORIAL OPERA HOUSEとして残っていた。吉田茂がここで調印したのかと思うと不思議な気がした。戦後71年が経過して、余りにも平和のため戦争の記憶は薄れてしまっているが、現実には我が国と中国、韓国との間には尖閣諸島や竹島の領有権などをめぐって緊張関係が続いている。

昨秋私は中国瀋陽出身のCさんと力を合わせて、模擬国連全国大会への切符を手にした。選考の課題は「異文化理解」だった。私達は文化交流は次世代を担う若者の交流に一番重点を置くべきであり、ただし、その際には自文化を正しく理解し、誇りを持つことが肝要である。そうすれば、自然と他の文化に対しても敬意を払って交流することができるのではないだろうかと言った。その事を強く確信したのは、まず私達の出会いがあったからである。彼女は2歳の時に来日したので、日本を母国のように感じていた。中学3年生の時に故郷の9.18歴史博物館を訪れた彼女は祖国中国の歴史を何も知らないことに気付き、初めて自分が中国人であることを意識した。私は、彼女が日本と中国の狭間で揺らいでいるのを感じた。自分自身も自国の歴史について多くを知らないことに気付いた。そこで私達は加藤陽子著『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』を資料として日本の近現代史と一緒に学ぶことにした。私達は、まず各々の祖国について考え話し合った。私達の祖国は、様々な問題を抱えているが、友達同士の語り合いで、相手の国の文化や歴史について尊重することができるようになったと感じた。背負うものがない若者だからこそ、気兼ねなく率直に語り合えた。模擬国連の基調講演では田瀬和夫さんが今国連で取り組んでいる「人間の安全保障」について熱く語って下さった。この取り組みは人間の生存、生活、尊厳を脅かす脅威を包括的に捉え、開発と安全を一体化する、つまり経済的社会的なアプローチと法的政治的なアプローチを連携して進めていくことなのだと分かった。そして何よりも、人間を中心に考えた概念であるということが伝わってきた。私はこの「人間の安全保障」という言葉に人類にとっての平和と希望を感じた。

北米の旅を通して、平和の架け橋が今日に至るまで築きあげられてきたのかとその歴史に重さを感じた。今度は私達が21世紀の平和の架け橋を架ける番である。Cさんと私が築いたのは本当に小さな架け橋だが、そんな小さな架け橋一つ一つが繋がっていくことこそが、世界平和への第一歩となるのではないだろうか。

2022年度 外務大臣賞

富山

テーマ：世界とつながる私たち～未来のための小さな一歩～

僕の小さな一歩

射水市立射北中学校 2年

棚田 武蔵

僕は今、「地球」というシェアハウスに住んでいる。近年、その地球は温暖化が著しく進行し、僕たちの生活に大きな影響を与えている。今までの僕たちの生活を守るためにも地球温暖化問題は、この地球環境を破壊した張本人である僕たち人間が解決しないといけない問題だ。

地球には79億の人がいて、僕にはピンと来ないすごい人数だ。165cmの僕が軽く一歩を出すと50cmだった。地球上の大人も子供もみんな50cmずつ進むと395万kmになり、地球の一周は4万kmなので地球を98周もできる事になる。79億の人が小さな一歩を出すと、何だかすごい事ができそうな気がする。

僕は今年の春、小さな一歩を始めた。我が家でコンポストに取り組む事にしたのだ。コンポストとは、生ゴミや落ち葉などを微生物の働きによって発酵、分解されてできた栄養を多く含む堆肥の事で、微生物の力を借りて生ゴミを土に戻す日本古来の方法だ。最近では堆肥を作る容器の事、堆肥を作る過程もコンポストという事も多い。ゴミが消えて土に戻るなんて不思議で面白いし、目に見えない微生物が生ゴミを分解するなんてすごい。

家庭から出た生ゴミは、燃えるゴミとして出されるが水分が多いので燃やすのに時間もかかるし、燃えにくいので石油を入れて無理矢理燃やしているのでお金もかかるし、地球温暖化の原因となる二酸化炭素も多く出る。

「家から出る生ゴミを、家で処理できれば環境問題は少しでも変わるかもしれない。」僕が小さな一歩を始めた理由はこれだ。

コンポストは思っているよりも大変ではない。一日の生ゴミをコンポストに入れるだけでとても簡単だ。次の日にはなくなっている物もあるし、分解に時間がかかる物もあるし、肉や油だと微生物が喜んで土がとても暖かくなったり、たくさん発見があって面白い。8週でコンポストに入れた生ゴミの重さは約18kg、コンポストの増加は約3kg、結果生ゴミはマイナス15kg！我が家のゴミはとても減り、ゴミ袋は「大」から「中」へと変わった。小さな一歩は、確実に未来につながっている。

SDGSに無関係な人は誰一人いない。誰一人取り残さない世界のためには、中学生の僕だって地球人の一人として何かしないとイケない。地球温暖化は、世界中の動物や植物、生き物全てに関わる問題だ。

「大多数の人の無関心が地球を滅す。」本で読んだが、その通りだ。逆に、大多数の関心が地球の命を救う事ができると思う。どんな未来になるかは、今を生きている人間次第だ。地球に住む一人一人が、他人事ではなく地球の未来に関心を持ち、小さな一歩を踏み出せば地球温暖化を少しでも変える事ができると思う。そのために、僕も小さな一歩を踏み出し続けていこう。

ちょっと寄り道



その
1

エッセイコンテストの前身となる海外移住検証作文が始まった1962年ここ北陸でも、その後の地域経済に大きな影響を及ぼす出来事がありました。

1962年(昭和37年)6月10日に、北陸本線(現 ハピラインふくい線)の敦賀駅から南今城間に北陸トンネルが開通しました。

全長1万3869メートルで当時 **日本最長** の鉄道トンネルでした。トンネルの開通で、この区間の急勾配区間が解消され、**輸送力** が向上し、地域経済の発展に寄与しました。またここでのトンネル建設技術は、のちに **東海道新幹線のトンネル** 工事に活かされることになったそうです。

ちょっと寄り道



その
2

1970年代にもたくさん**の流行語**が生まれました。
説明を読んで、**当時はやった言葉を当ててみてください！**

1971年 会社をやめ、独力で事業を興すこと → **脱サラ**

1973年 環境意識の高まりとともに、資源を有効に活用し、環境への負荷を減らす
取り組み → **省エネ**

1973年 1972年に選ばれた交通安全標語 → **せまい日本** そんなに急いでどこへ行く

1976年 国会証人喚問で、証人質問に対する言い逃れの言葉 → **記憶** にございません

1976年 男性と対等の立場で仕事をしていく女性のこと → **キャリア** ウーマン

その
3

1980年代に流行ったこれ！ 覚えてますか？

1

1980年代初期の日本で短期間流行した暴走族風の身なりをした猫のキャラクター企画。正式名称は「全日本暴猫連合 なめんなよ」。そのキャッチフレーズが「なめんなよ」だったことが語源

1



なめ猫

2

1982年、サンリオから開発されたキャラクター。雷の国からやってきた兄弟の設定。一般公募によりキャラクター名が決定した

2



ゴロピカドン

3

1983年（昭和58年）4月から放送された、NHK連続テレビ小説第31作目の作品。最高視聴率はその年の11月12日放送の62.9%を記録し、ほとんどの国民が見ていたドラマと言われる。その後海外でも放送され世界60カ国でヒットした。

3



おしん

ちょっと寄り道

その
4

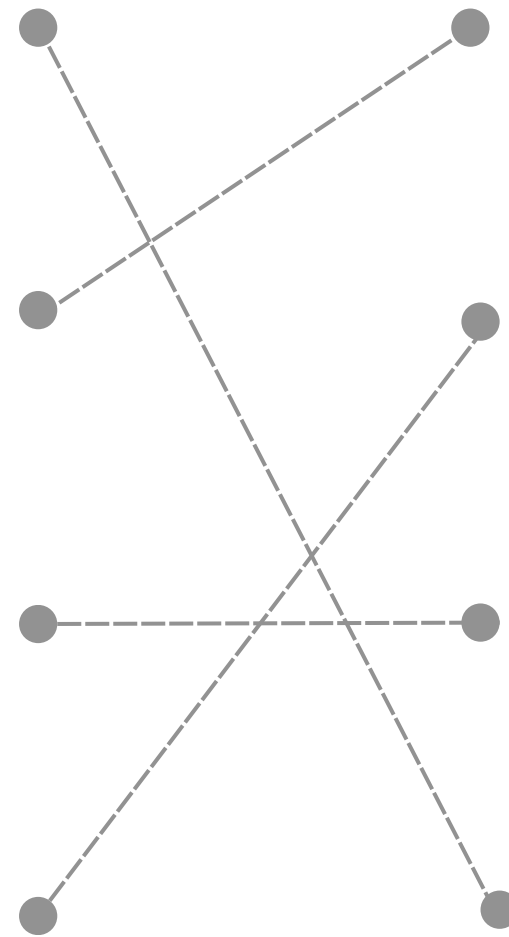
1990年代のこの出来事覚えていますか？
同じ年の出来事を選んでみてください。

1990年
大学入試センター試験開始

1992年
日本人宇宙飛行士毛利さん宇宙へ

1997年
消費税5%に引き上げ

1998年
長野オリンピック開催



学校週5日制スタート

明石海峡大橋完成

もののけ姫公開

ちびまる子ちゃん放送開始



その
5

覚えてますか？ 2000年代。あの年のあれこれ

Q1. ディズニーシーが開業した2001年に始まったのは？

2000年 / 2001年 / 2003年

Q2. アテネオリンピックが開催された2004年にヒットした商品は？

2008年 / 2005年 / 2004年

Q3. 愛・地球博が開催された2005年に公開された映画は？

2005年 / 2007年 / 2002年



その

6

＼まだまだ記憶に新しい？／

2010年代の各年の出来事を象徴する キーワードわかりますか？

2010年

「イクメン」という言葉が流行語に。ブームのきっかけは厚生労働省が育児休業を取りやすいように企業への広報も強化し、仕事と家庭を両立できる環境を整える「イクメンプロジェクト」を発足したことからである。

2013年

国際オリンピック委員会（IOC）総会で、2020年オリンピック・パラリンピック大会の開催都市に東京が選出された。滝川クリステル氏がスピーチで言った「おもてなし」は流行語にも選ばれた。

2017年

3月24日に発売し、発売後約2カ月で発行部数148万を記録した うんこ 漢字ドリル。小学1年生から6年生で学ぶ、すべての漢字の例文3018個に うんこ を使い、漢字勉強を楽しく笑いながら覚えられることをコンセプトとして作られた。

言葉が
つな
ぎ、

そして、2025年エッセイテーマ

世界の幸せのために 私たちができること ～未来へつなげるために～

未来の
かた
ち

このエッセイコンテストが長い時間をかけて大切にしてきたもの。それは、世界と向き合い、自分の言葉で考え続けることでした。「何を大切にしたいのか」「自分には何ができるのか」を問い続けること。この問いを胸に、それぞれの場所で、それぞれの歩みを、続けてください。

HUMANLINK 1962-2025